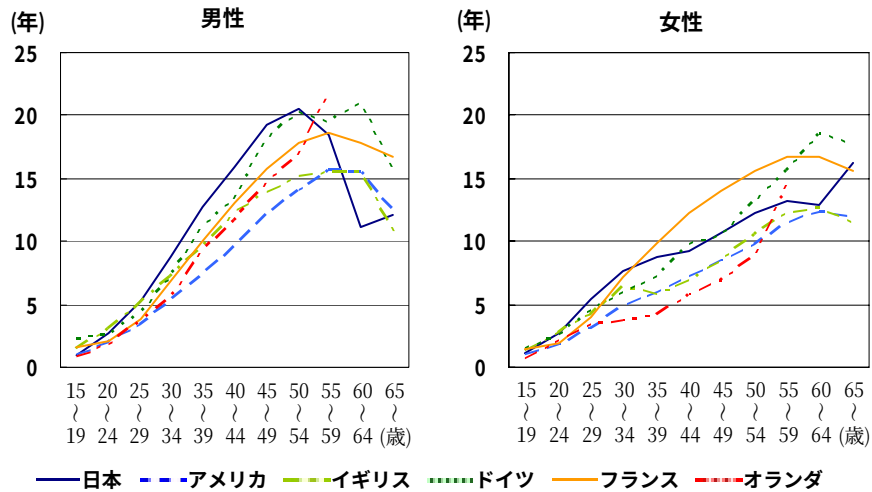
3-5　平均勤続年数（性、年齢階級別）



▸▸グラフの具体的な数値および資料出所については、「第3-15表　平均勤続年数（性、年齢階級別）」(p.114)を参照。

グラフは日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、オランダの性、年齢階層別にみた平均勤続年数である。まず、男性についてみると、年齢階級全般についてアメリカの平均勤続年数が他の国々より短いことがわかる。アメリカにおいては、年齢階級が５歳高まるにつれて、平均勤続年数が約２年ずつ長くなっている。これに対して、日本では50歳くらいまでは年齢階級が５歳高まるにつれて平均勤続年数が約３年ずつ長くなっている。また、他の国についてみると、勤続年数が相対的に長い日本、ドイツ、フランスのグラフの傾きは急である。60歳以降では、日本の平均勤続年数は急激に低下するが、他の国々の平均勤続年数は大きく変化しない。日本の労働者はいったん定年を迎え、その後再就職していることが、高齢者の勤続年数の大きな低下につながっていると考えられる。アメリカ、イギリス、ドイツについては65歳以降に低下が目立つ。

女性についてみると、フランスを除いてグラフの傾きが男性に比べて緩やかで、特に25歳以降は傾きが緩やかになっている。いずれの国においても、男性の方が30～49歳グループでかなり急になっている。これは、企業への残存率と労働力率の違いを反映していると思われる。